同人作品

余光　　秋山義仁

早い冬弘前城門のもみじ散る雪が降る紅と白たわむれる
雪虫とんで冬が来た山間の落陽くらがりに去り秋は去る
夜が明ける窓撫づ風のほのか音産毛けばだて一瞬の時
ささくれに涙を流す北の国木守りリンゴに襟巻き地蔵
雪降れば首をからめて凌ぎあう夫婦鶴北の大地にポツンポツン
雪解けの水を集めて落つ滝のその名は知らぬつららは伸びる
遅い午後日差しはぬるく崖つかみ吹きこぼれる余光ある
こぶしの木朝日に染まり赤々と映えたつ時に君は旅立つ

笑顔だよ旅立ちだから手をふるよ進む君等に涙はいらぬ
過疎向う鹿角花輪はリンゴ時買ってよ買って一籠百円

赤いソファの夜　　石邉綾子

一夜干しほどよき酔いのその先に一人歩いた八戸の夜
人生はそれほどまでに酷じゃないと思う端から雨も土砂降り
ひさかたに友と訪ねし大森のスナック「わく壱」ソファが赤い
スナックの女の子たちはチャイニーズ昭和レトロの哀愁まとい
バーベキューの道具そろえてもう一度巻き戻せたら遅い青春
ガスグリルの鉄板重いこの上でおいしく焼ける肉たちを待つ
肉背負い来る人を待つガスグリル冷えたビールと私は待つわ
水遊びする子らの声聞きながら青いレモンの輪切りを浮かべ

夜涼みに親子来たりてひと騒ぎ遊び疲れて子供の寝息
静寂は贅沢なのだと気づかされモンブランケーキのマロンいただく
お返しに招かれテラスで夕涼み線香花火もにぎわいのなか
この誘い邪心はないと知りながらそらした視線の先に満月
宵風に頬をなでられ細胞のもっと深くのおんな目覚める

父母と妻　　井上省吾

今はただ恩返しせず見送った父母と妻祈り捧げる
幸せに暮す我あり有難くお礼をこめて先祖を祀る
今はただ私に出来る朝夕の時間を決めて仏壇の前
傍にいて我を導く父母と妻の護りで今日もある
父母と妻の護りを受けながら寒さに負けず楽しく過す

護られて我幸せに暮してる父母と妻忘るべからず
目が覚めて朝を迎える有難さトイレに行きて朝の始まり
神棚の水を取替挨拶し仏壇の前座って祈る
白梅の花が開いたすぐ側で蕾膨らみ出番待ってる
変り目の冬から春の服装は天気によって着たり脱いだり
墓へ行き花を献げて手を合せ日頃の護りお礼をのべる
どこにでも姿見えねど側にいて我を護りて導き給う

園芸　　**甲村雅俊**

園芸の心得なしに植ゑたるもトマトは黄色い花を咲かせる
青空へ飛行機上りゆくを見る介護離職のさみしき者は
夏雲は西の方から東へと手を取り合つて流れゆくなり

鮎走る夏の盛りに不安なり猫に網戸を壊されてから

スキャンダル沸き立つ令和五年夏未だ梅雨明け宣言はなし

コンビニで弁当を買ひ食事するこの毎日をいかに愛する

クーラー

借り暮し続けて来たる吾にしてクーラーのある部屋は初めて

クーラーをつけたまま寝る背徳に夢の中でも喜ぶわれは

猛暑でもクーラーあれば百人力四十度越えてもモーマンタイだ

クーラーに愛を捧げてゐたりしがこのクーラーはゼロ年代製

冷房の設定温度を上げただけ地球に優しくしたる気がする

東京音頭

なすべきをなさざるわれが横になり風に涼めば夏の夕暮れ

カーテンの揺れてかすかに良き匂ひ運び来れる日暮れの風は

日が暮れてどどんとどんと盆踊り猛暑の夏を演出したり

さはがしき世相なれども夏の夜は東京音頭で情緒一服

たまかづら花の都の真ん中でやあとなあそれよいよいよいと

金鳥の渦巻きかとりせんかうはかをり良きかな毎晩焚かむ

窓開けてかとりせんかう焚きたれば父母未生なるわが夜の時間

わが部屋に南の窓ゆ入りくる夜風涼しき梅雨明け間近

もち吉のせんべい

もち吉のせんべいを食べ一休みキャッチコピーのやうな歌詠む

ひとはこに種類豊富な品ぞろへ餅のおまつり本舗もち吉

せんべいのかけらを口に運びたりああ安らぎのもち吉の味

あとお茶があれば至福のもち吉のせんべいなれど水を飲みつつ

最近

最近になつて知りたるもとの意味Ｚ世代のＺはＺＥＲＯと
若年性痴呆症とかあるらしく私の脳はいつまで無事か
白波の水泡の浮き川開き水難事故の相次ぐあはれ
半年も床屋に行かずぬばたまの髪の伸びたるまま夏になる
スマホを手に音楽ばかり追ひかけて真夏のど真ん中をゆくべし
いくつもの夢の背後に性被害秘められてゐて芸はさびしき
床のうへ踏みて曲れるフレームの愛用眼鏡かけてさびしき
あらたまり諸経の王を紐解きて南無妙法蓮華経と唱ふ
北一輝は法華経の行者だつたのかわが人生はいよよ煮詰まり
わけありて面白さうなテレビドラマ一つも見ずに夏を過せる
君たちはどう生きるかも見てゐないお盆休みに見るつもりです

部屋から見える　　氷室敬子

ああああなたでしたね高い台にある茶器入れに手をのばすのは
あなたの影が部屋から見えるもどってきたのね私の心も落ち着く
だめという作品も動悸の続きそのまま死につながるものとおそれがある
カーカーと鳴く烏さえ内には切ない悲しみをもっているだろう

五月の薔薇　　本田洋子

濡れているキリシマツツジの赤い色花の命は四月の雨に
五月雨に濡れているのは白い花一面に咲きしドクダミの花
歌えない華麗なまでに咲き誇る五月のバラは美しすぎて
絵の如くバラのアーチをあしらった素敵なお庭兎のお庭
五月晴れベランダに植えし赤い花日々草と遠き爆音

陽が昇る静けさの中小雀は白い花びら朝ごはんにして

大雨のあの日あの時あの人に出会えなかったら駅で泣いてた

雨の朝閉じ込められし寂寥にコトコトコトと人参刻む

やがて来る猛暑の片鱗覗かせて梅雨の手前の五月晴れかな

吾が心半分は闇もう半分の僅かな光で生きて居りぬる

半分の光で生きる私は顔半分で笑いて泣いて

紫陽花のブルーに染まり始めたら一つ年取る誕生日近し

まあるくて手鞠のような紫陽花の風に揺れてし水無月の雨

送られ来しスマホの動画美しく「四年振りよ」と花火大会

一群れの杉の木陰の鈴蘭は今も咲いていた亡き父母の庭

故有りて行動停止の日曜日仕方無く無く風と遊びぬ

さて一首作らんとばかりコーヒーを飲んでばかりの休日の午後

すぐ前の中学校の体育祭ピストルの音生徒の歓声
陽の射して台風一過の日曜日あれこれ干して忙しかりけり
藤井さん何処まで行くの雲の上二十歳で名人明るきニュース
公園の叢に咲く露草の小さき蒼に引き寄せられて

検査に耐える　　丸山光

「引退後どこに住むのか」あなたに付いて行きますと言わない妻
待ち合わせ見たことのない靴はいて赤い靴はき妻があらわる
皿洗う人に限って皿を割ると屈んで妻が破片を拾う
悪魔さえ慣れさえすれば折れますと小顔の悪魔の折り紙もらう
手造りのコンクリートの池の真中に巨大カラーの一輪の咲く
神様を問い詰めないで生きるため心開いて思いを語る

ガン研のさくらテラスでお茶をして心の思い半分語る
説教を短くすれど間に合わず尿もれパットの位置よずれるな
遺影みて随分むかしの使ったねとご近所さんがひそひそ話す
皆様が悲しみ負ってくださって私は感謝と残されし妻
若き医師わたしの尻に手を入れてガンはないねと明るく語る
語れないことについては沈黙とそこだけ分るウィトゲンシュタイン
父に似る母に似ている兄らいて共通点は前立腺肥大
尻出して針の刺される検査うくガンになるよりましだと思い
セーターの大きな星のデザインに見ているだけで希望に満ちる